特別
遠
882
7

繪本傾城飛馬始七之巻

六の巻はじまり トヽ文市何おとこつでいつてハ 文「アレ白雲八方へたなびきかゝる黒雲むらがりさいだつる空の氣色を是さのことうどる吏小もあきぞ トヽ甲斐之助ト中二階からひよつくり見て 監物「ふ義者めらあれ上るみ 甲「こしく鹿わけふさしふ義の根ほへおいぞ 監「己へおいとんふとい奴りのされあうむふぢを身共が揚詰スりや身共が妻女も同前しかふよつて ト甲斐之介とさんざんてうちやくにおよぶ 文「コレイ市殿なぜ譲つてくんせぬことかうら 監「ぬかしたる其ようかしが胸がうるいさい甲斐之助とぬも大氣の男ぞ傾城のぬとくく喰られでも武士といつろくのふとんやつの トさうかう文市監物を引わける 甲「ヤアそこな 監「文市さん 監「さいぜんの文市ふ甲斐之助とてうちやくとるとそちや何でくどふのじや 文「イヤく

旭
明治三十六年五月十日購求
遠
門
號 882
巻 47

ゆせぬ兎角行更のふ性義をゆふちるのがたいこの役〱スリヤ其い方が
又〱かうち望のふとひ〱ちんと〱間丈の出食を勤のたのをそれと
とら〱へてふ義じやの嘉男のとちらと作山る外ろうが為よい十方且
形監物白沖ろ男がありあくけつやゆ拍客のうろふ世ふこの又市が
沖右ふるまりゆせふる〱イヤサ其義を〱ろうふ吏ときろぐ迫〱
拍股とをられ外と西瓜じやのやぢのと笑ひ外ぞ〱今ようる
を鍛じやる〱三ア甲斐之助分あるを拍ゆうるされゆせぬ〱又市分
共日停をとち〱ふう外まど名草とゆうふづふとゆ〱紂丈の出陣
とゆらいふ沖用とく〱てムろ拍ゆでいうるほいといつて此むあぢ白と
○ア家前もちとと又外をべ義のあふ〱とをとゆうふ拍方が大
勢いろひよく〱さじやろうゆせぬろア〱又市よりあつてたをろが

ゆつをやらふ軍をゆめじや出陣をちんといやじや〱ニア〱ハテ軍
場の鎧甲より左丈が脱ぶ鎧形甲形の紘と志め寐布の組ろちふ
組んづ猶んづの綱を左〱て両るが間のちろび寐ろゆ拍て見をを
ちうんの間の猪先ようる志のゆろく〱とろぐ廓の拍びが面白じや
〱イエイ方軍ふゆろ〱てをろと迫も氣づろひふろれどそ〱ムろだ
べあの武將分とゆろの沖接嬢がろうろうふ大切る栗路の沖家が
〱ハテろふが立ちろんちふ吏をろんじやていコリヤ糠をあられあうんん
ゆの〱ムスリヤ乃志実出陣を〱けもふいとく〱トゆ〱イヤ
法さいでち鎌倉へ中沢が立ゆふトゆ市の西を又〱甲斐〱分甲〱十郎の
ふ〱の〱甲斐〱分屋此安名草の塚ろ立ゆ詰ろ尼子浪人先達を出ゆ
倉ろの家弱もちゆつらがろぐ今安の討をへ中殿と拍者をお役の

其えを廊おびみ放埒出陣の延引を某へもつる実録今ゆるべ
孫食ようさいそくの役者をべ返答ハいとでゑトこあ
双方ぐんと
ゆて出て「サアくナ松大尽奥での勝負ごろへもうと下村へ
せふ「仏ドゆ双方コリヤようらふ的共も打ふ見へ
あらべ出るとト「拵くし女ぶ「イヤ双方ようう大切る出陣の返答「ヤく
殿方ゑあのゆふ「ハテ大吏ふいふゆい「ナ出合勝負ハ酒ごけでど
ざうみぞへ「ナけくものが呑のうよくト西人石とるとべうるゆ南
ただと盗きせうとさけ出ゆもうだ南
双方のるとゆうてうきさげす
みナへ「ひあぶ合出合堪忍してトさんせこゆ此ら郎合ゑ用ぶ
ゆうふいナトふふ義ぶ姫とうゆ
つと義ぶ姫とうゆ
ふうふふ「大吏ふんせあるふゆ「ハアさそふ又ゆもちしゆる「アイ悪

性るせいとうきゆたトぴんと「市の西合こアゆやどふでゑる「ハテうふ
ゆと有ぶ陸奥の奥い「お顔ぶ拵ふ「ふくくよあゆるのう「アんきト南
「きーゆやだいうト市のふよび「ふくくよあゆるのう「アんきト南
をえ「ゆくへん「ゆナへと「ア「の懐さん今のく「そゆやどゆふナ
「酒ようせあふふナ市「コリヤようふ「コリヤようせうふ「トふ
まんぼのようふ合ナあゆる盗物甲盤く矢とうふ入ふふいうふ
甲盤く矢ふふふ入ふふいうふ
ふる市のふ又市く意味合ふと又甲
いふふ市のふ又市く意味合ふと又甲
ゆ「又「コレくゆ池ナくトふを
ゆて
ゆふふでゆるくトふを
ゆふふでゆるくトふを
「情ふい又食どゆとるふゆ「イヤくゆ甲盤之助其ふ盃でを酒ふを
ナい「のゆくトゆとまぶんゆどのふ石とゆるぢえてあとのむ「ナヤ其ふ

盃を市の亭主へ 市「イヤ拙者が方へ鉄砲塚弱本根 三又「三て 市「イヤ其鉄炮
の上は 三「スリヤ トところを又市 又「イヤおぐらん耳しう少々ござりませぬ 造「いか
ゝもうちのつらへ 市「さげ升もなりませぬ や「大てい色事ハ上手じやないつらい
亭 市「亭主が是はその種が島 又「イヤ其盃をのゝふくふふ少々 三「相手を
あひおくれとのゝ升か「色と酒とをきれい好物「種が島とへ盃を
事く 甲「ハテなるでおか揚やのこのがし ト卅余より五十余出かけうろうろ致しくゝあつ造おとう位入おさせ
目くせさる「甲斐之助をもら 卜致「己が家来のうるさが 母「イヤサ是を
甲「是どもを何しさる 母「是切お出陣に 甲「出そみで出めとのかのかト下段の
方へ見てあげる又拙んのがけて 母「そんなら此 ト又市又のろをそるよ跳るとん 三「こいつ又ふひ
その方るとむろくと ト上の方へ見てあげる又拙んよつて甲斐之介 造「ヤア又
市うめへ 又「家来お松大岸に頭つき其小柄とハテちんじちう 造「此母なり
と 甲「是どもが家来嘗しうお 市「ヤア 造「現在の家来を殺されても 市「くる
しうおいらて 甲「ねんと梓でおのがの 市「イヤ蓮ふる鹿じや トのどへ
る 造「其むかし呉王が為に獅しめを受又かんしんハ市人の股をくゞり恥を
忍びて英勇とおつへを身を放埒な揖崩れへ訣とそろ術の一つ 甲「そん
なら拙者が 市「色と酒とをも香ともちる人ごとる松が市の忠次郎 甲「ようお
拙者へ 指授の花もさかせよ 之「其されよしむおい宝物是 造「甲斐之助
して名草城の出陣に 甲「己が其盤面の向に トとび立さんとおへ出を 造「是其の其のつどんの
中に 市「天竺にては破羅塞戯唐土にては握槊と云則碁の事にて
敵地の向ふへうち 甲「一地より六地まで向ひ合せ敵味方黒き石は悪術
又も白き石の識を以て 其「五地六てんとあててとうとうてその「つくる
それもおのの手勝によりて 之「其四其三のことひ目とあつてめいくる

五地をはくらせぬ 布「きき六でつち重目まで飛出る石を立切折るさ 又「石を
剣て道をし捨石拵へあく追もとるまいを攻て一地より六地まで埋さしく
あ由由にそろを 甲「文謀をまいて五地六地と 呂「まさろって算を入出して切遠へ
入るぶれてハ長蛇の陣 三「切てく切立死石おぢとも秋終地へ積るさるの
手遠へ悪目の出る其隆小五ぢん六ちんと遠すもとれバめつさ小出来まと
ぬ 甲「イヤ切目あくとるを配る好みとろつてや「一歩ひよ悪目と無ふ
下も 藍「上手へく 布「のぼれバ扣うその時節があるふ 藍「白ひ黒ひのてうちも
付るぞよ 布「幸と田かめて文一さん 甲「お役の出合とやいさそふ 藍「ちよと見えと
ト甲蛇と余ま起こけくと 又「すこし扣とけやませふ「ちうれさ盃 布「そこの忘れぬ 又
布一寸しも田も 三「奥へ扣供 ト弦やすまう や「コレ用があるまア 甲「よふく云妻
しめ 三「それへ トうねとつくを弄す取と甲蛇と余藍あひるぢ中の小ふト おさうさるく扣へと入あくるやうぶ文布ぶ手ぞくのさり

や「三郎さん 三「文布 又「今の松が粟島 三「対手とあれば や「コレ トほまく
文布ニ三手まくが ひるまぐらとより 三「それさへ引さうれめ 又「コレ其中まで や「いやそうう立
さやあらぬまいか 三「何のことじや 又「とんと訳が志れぬ や「文布さ
扣まへも一穴の流じやぞへ 又「そうさやア何るじや と「うてくふてへく
悟気取り「サア大変とうへてふせ悪性さしゃんと 三「何と や「コレ扣まへハ
きちう色の新造を紫よ起請をもらへしゃんせふがるよ 三「る鹿の変文を
ぬうとるんは や「馬鹿じゃムんせんこれ此起請 トすりうと 又「ヤアそれへ ト物する
や「何と文布さん扣まへも覚へがあろふがの 又「ム 三「其ままりと起請ハ何の
変じや と「いさしゃんとるアノ文布さまに託けて至しゃんし と花ひらさた
が起請タア落しの目ぐ文布さまのおていやしゃんをとそれと捨て戻つ
てくふらし小波さ志ゃんし此起請ハとうれでも悪性でハムんせぬうへ

幾うら
嵐小六
三うめ
尼崎仁壽門
乃一の
中村吾六
亦市
浅尾新十郎

「どれ」と云てやのうと々スリや見と又市が「ちつと訳のあるまうしだや
それとうけちへ「イヤ又市スリやいよ〳〵此まりとそちが「そうやてそ
悪性なもの仲間うれしやト云うゝ紅のうるき
覚悟せんト切てうる又市「イヤおまるまい結て「うゝ比奥ふあつの
ト云ニ云こと切てうる又市「コレ結てトさんせ「エそめんどうふトつゝのゆる
ゆるめるうとあて
後ろの「ヤア此うゝそひい「為縁なちあいと云てトさんせ「ヤア退く
ト両人と引のけ又市ようる又市又「弱本根ふまうる合点の紛め今戦
お名を呼ー紅の欲とも「達摸を此まり所〳〵ト切うると又市
双方ぐんうそめて紅のうゝ紅のゞまうあるさん「そんあゝ又市ムゞ拾
ていやんゝと「其起請といい「欲対の達摸「エまんと「弱共ゞ
紅弱本根金左衛門江州坂本一戦の御お味方やせーうひもふく周ち

没落それより紅子ふひゝ引うゝれ而〳〵方〳〵とさめようひしーが時ふつゝ
此家の金行乗父うも長ふあうんゝのとゝと砕く打も拾う時夜ふる羽
縄をと通う合せー而ふ盗賊と拾ぶーき者又旅人の死骸よゝく
又ふまゞ紅人金左衛門阪ゝ南ゝ三宮仏者の寺ゝさあうゞゝ
却やゝ念ゝ暇うゝとゝうの男ひ孤ゝふ今家浦ゞ起請ゝいゝ
後ーゝ是此ゝうの内の出付ゝ紅弱本根流の大箱の秘書巻と
而拾ゝう十右衛門ゝあゞゝれぬ紅のうゝ「ゝ拾ハ時夜ふる羽縄
をふ拾のて出合ー旅人ゝ八郎の御紅又弱本根金左衛つゞのゝふ
「いうゝも「ゝそれゝゝ寺ゝゞゞ羽縄をうて盗賊ゞゝ今左衛門後
とうゝ「踏狼と後せと乗ふ而へ思ハゞ糸り拾子とまゞ紅百まこう
ちも軍用金武士の情ふ偽羽せんと盗賊ゞゝと切ゝゝひ右の拾ゝと

金左衛門尉よりおのれて彼ひ其角ゆ盗賊者を切てうる老人の忠孝なる
うぬ深夕なる時の災難救をうれとの一言よりでひまふ武士の義と思ひ軍用
金の其為又不達助うぬ金左衛門どの盗賊をうるも切殺し数百夜
のうち緒共奉ひ元 其ちうち後日の證據とおもひ也を造る
其上で逢と討ろ不在 サア其不在あらう之上へて勝負せん イヤ
勝負ったせぬそちが在らゆト箭さ ヘヤあんと 此災ひを家系の天
文まてとくと考へ此墓塚名草の塚も考ひ時節其方我と討
あわせ義と金銭を義久公武勇とつくせ ヘヤ匂ひせぬ死人も用家
くく討も討るとも 武士の本き サア討 イヤ且の場りを文への
義養此弱太根と討るるせ ヘあんと 名草の城の軍師と成れる
其方もうどゆ ナゼ弱者と迄うく討う て忠義をけくさん イヤ義と

討を孝の道此ひのがれぬ此墓塚 ヘヤ弱者を迄う討よ討とても軍師の
其方生ひ ヘば名草の城をんこの統塚 其忠孝を知へ ヘサア墓
塚 サア弱太根 ナゼうぬ ト云あんを引うけ中へ ヘイヤ
お二人それでは忠孝が立ん ヘあんと さうふア孝人の親ぞ 宮法の
浪人お主の仇と時をまつ思ふひの一筋を茶わも知人も墓塚名も
思ひ思ひて同じ更 ヘの浦名のいふての通り宗方のほ 歳中ふたら
が討ても討まても名草の城のよう ヘヘヘ却て敵よ殺ひと分の道理
ヘ乃ぢめ智恵のうう ヘうも成ぢ ヘくが大切さ ヘ約束もを ヘて
此場の勝負を ヘどゆぞ延て ヘアさんせの ト法人西方ようとも
あて ヘヤ 敵よ ヘうう ヘ塚 ヘ弱太根 ヘ鹿追猟師 ヘ切の子のうう
ヘ名草の一戦 ヘうる時節ゆ ヘ敵討ちうう ヘ更 ヘトやふてめき

たのしき其黒船 三「今それじやト みなおつがもつて来たふたつのひなを二つにおさへ 又「それハ 三「献

討るまいぞ 又「今光る源氏の若草の其上に紫のうへおゆかりを繕ふ

三「其ゆかりともに今いふ這子雛紙のおしき も是にあはせてござらうし

とのぞ 又「須磨の浦にもと雛拵びにあるその紙の人形と雛とならべて

其の男にあらぬ女の面影をむすびあはせて猫とよくなると家の這子拵びをするや

そなた雛ときりの詮ぎで 三「釈の紋付を塚へさらさら「其の家ハト どんちやんきせぬを見るる

三「さアあれへ 又「市ノ正が行ひ第一公の御身の上 三「スリヤ 「其て 又三「それハ トマ市倚る

そくいたるそ為しのとつましやへいれと入れようと監物ひまぢを引き出る 監「さてや何とさしゆんとそのなアア 監「何とも

せぬ其御教書をいちへうらせ 「イエ 此御教書と持て居れバこそ殿を

の邪魔をひろうしが為ゆゑ大事のく其の拵らう浚と変ゑてあるらい

さア 監「其でめんどうな トむりに御教書をとりあふゐるよそしく立まよふあるへんのお甲斐ど共つて出る監物とつれがいまで家もなし

「ヤア殿を 市「此猪の廓通ひも此御教書をとりがへんためのなぎごとじや

のあろうかひ 「そんなら 甲「コリヤ何にもいうてはおらぬぞ ト ひなちがへを引くとひてんへ

監物が付く 監「南無三宝ぬと ト退ひとかけ市の正出る 「監物ひとつかわれ 監「市ノ正居れ殿

吾とらひ甲斐之介とおのれしてかしてを 市「若しうるやい甲斐之介ここは

めに球攻の一番の此方へ来てとふべ通いはいいきのゆうがあかめつ 監「なにを

球肉の身多とて物ノと 一 岩瀬主税お来りけれ 「ハア、ト 是さかりまし主税出て来る

監「ムヽリヤ佐頭の球住とふでも 市「いかも居子浪人山名へ廓と迄へ

むねども只ふより新島のあの者の四体みんな見ぬを廻さをとりて

て入迎させてまぐてそばとる身其が対賭 「ク深とやりせつ議の法

師とみれらが使者様も拍子と何か家名草の要害家中を狼につ

きいて手て其の支てむかふて喰の事が起こる作法時も早く御出ての上て

紙ろべうなど作る「竪」「ひよろ名草のごうでへ西びと入攻ひと何ふ名草の出
「市」「イト」其を迫ひ遠ひうでの四と何ふ寨うまての江ま名草の出
ぐ弱ま築山とつ七二つのせいらうと接へ「市」へ開者と入至ま紅の帆ちら
と指て彼山ふつひ三せいらうと弱上ふべ要害と何ふ寨ひ名一是此めく
ちてめ至ー せいろうみ絵宗ま祝其方々竟とうて名草の陣
家へ三城遠ひの国三めぬうまト絵場とうて「分」「社者」へ寨ま分
名草の陣家へ「市」ふく寨ま「ひ何ま」ー さト絵場と「竪」「合」「遠めの対
シテ 社者ま「市」「コ」トま「竪」「合」ー 遠めの対
の作者ま「作」「市」の広分お迫ひ「宮」「宮」子の列ま当の出陣トのうぬ寨
物いまケ「ハ」トのうもの名て弱又市つ弱ふ攻うまてある弱分ふ市
引ふ「ー」ー出ふ又市ふて「裏」宗寨行「ハ」軍「帥」の長場ふ「て」市「広

が味方とうんせうでと何ふ弱兼絵列絵場又「切働」出来ふ「ー」冊斗酷
の裏とうく列弱ま根ぐの「市」を練「ふ」ト絵ぐ「ぬ」を為て寨ふ「ひ」行る
おめく弱兵ぐを絵彼せいらうう何ふ家と絵ぐひ「ー」ー「て」ふ「ー」対
又「時」切とうふさぐ名草の形へ「弱」「ぬ」とうへて「絵」ぐ「ぬ」塚「弱」く
ふれ「合」ぐやトふうう絵ぐ「ぬ」と接ふ「ー」ー「ー」ー入ふ又市のうう弱へ「竪」ふ絵ぐ「ー」ー
「竪」「ふ」の兵ふれ「ふて」ト「軍」出又市を「竪」「尼子浪」へ絵る塚十五東門ふめ
うてを接ふる脇ま「竪」又「ひよろ」を「ぬ」ひよ及ぬ弱兵ふ和名ふ「ぬ」を
ぐふうて又ふる「竪」「者」ぐ「ぬ」そ「ま」やトまふ又市ふうトまを「竪」ふ
ふうて軍ふふく迫ふ竪和切てふ迫ふあけて「竪」「ー」「ー」ー
ふうふへあげふ又市おけふふ「ー」返「ー」
造り物奥深ま廊ふの俳冊節義久ふ間ま接ふとう奥へ若ふと
軍兵六人左右ふう絵ぐふとふて五中色若ふ走ぐう遠せあ根ふへ

まくむうへ出て

尼子四郎やらぬ小しやかぬ桂宮めら一こ死人の山ぞ

とつとあるの

ゆりこうめトゞ軍兵こゝ〳〵そうぐとへゆげるよう

飛うゆふくるおくびやうりうつかる出

ふり其の方へうし塚ト軍兵人左右

三まうて これよりちぐふ名草の砦へ まあをと引受ちあぐ〳〵く

ぐも軍死 それの合戦 うぬトうるとこうの双方 うし塚ま

れ ハウト 切の血とめぐふ チヨン〳〵 幕

幕の間きぐう遠せめうて幕の外へ出たの芝中ゆせらうをせう

よるよれ時ふゆ鉄砲のきうてせらうより血煙ううう チヨン〳〵

うてせらうえの宗へ納る見うて幕ゆる

造う物陣家の体 乱抗逆成ようてうちんゆまうこと立あこ生のゆる

松ぐへ市ノ心陣羽織小ゑ御尚うて成ようる上の方よ東柔左

待門田畑左近トの方ふと岩淑監物久留島安助世人報告く

陣羽織の名乗うて成ようる後ま出功の軍兵大せ心ゑうへく

昔ゑきぐう遠せめうて

ようの御上使ようへ御 昔旁子万ふなど 外る 此後尼子の一ぞく

捕ふ給うし名茶の塩方性古民のあり まう物と思ひの外の大てゑ

去ふよりて松ふへ市のこ掃部栗原軍製之助名御出而ふ対面

地役国くゆへ田畑左を 世東柔左東門東西ぐの命ふうふ軍

の御見意うして 引着仕つくり外る 市 これい御西西ゑる

御昔旁ふ義ど外る此後の大敵ま兵くの結ひぐ向られ夜お朝け

遠せめるぐふいろ〳〵ふもぐつし ゆしてもいの 二落ぬうでのうゑ

志う御まつりひさるふくすま基が出る後をうへ物のうへふせめ屋
く拙員ふうけふあとをうるこそ今日のうへを今勝時よると御面あるも
え物をうしめれ仮名其えの軍配あらべ一をもみゃへ
甲斐く助義を都路系の廊ようふれ彩ふれどもふとう面世屋
の付をの後軍とるが恐ういめへ迎迫る猛宿神をいふうけをのふ
知彩とれて大名でいあどくを第一事山殿がる孫らうなるトは出
姉ふ山ふそそ市モウ三うをふ市おーどトけうまるしれ市のふ何
う拙結るをの伴とんへ歩るが市うやを義ふてみる市のふ何の智賠して
うでの内と何いんるせらうの御工夫其後員と受一遠えんのうのと
拙ちうをるうくのでみる仮名せらうの系も逐河てみる結み邪
大をふう物をふふみる市系が軍賠よ秀るうへ呂人う遠えんが海う

次弁各く方のむ学小遠ーせふ気ふうふ地ーをふ西ードをダナ
両人ふつて遠えんの扶子と何かてまれトは弁弟三人ハトふて
で扶子がおこうふ弁亜ノ攻ふの用き市のふ今市用きあれ
ませふ市仮のく目ぶに欲いたりぎれを浪人百性拙弟はまうう
うらで寝るとさにせうかりてえんせふちとに廣ふ中ーーーふが拙文の
合戦ち拙者が員うふ志ハふ小児とあふっ中ーふ拙ふ人ートは
右の軍ふいて出ふ市のふ今遠えんがふ拙ハてみう拙ふ帰ハうく
トせふうふを志軍ーこれが拙のの弱せふうでみるうふ市さあうでみる
者く方ふる後学の為じゃうくはまあふれふ拙て合戦とやあい
隙撲遠変小軍慮とんうふうらが余人の及ばさる面でみる市後の通
此弱せふうとうハてうでみう面人用の拙ナ呂今お受小遠ーみる

それ軍肉を是へ呼出されよ　監「心得ましたト監物次第に立かゝつてせいろうと呼る内に早軍肉
きんちうらうざけまでしんで居るけ　市「軍肉遠見の役目を暫く手とりでの孫子をくと
何かさわぎつドやく　監「軍肉とりでの孫子を行とく　夫「昔くの御前
委しうやよさがよい軍肉　市「勢の多少兵粮の分限をやく申すは軍肉
これはきつう軍肉そのと云める軍肉く　監「軍肉行をいつもしく頼る市心
今の目通りじやきまを性に持軍肉　夫「さうとてもさ軍肉をやくこれへ
ト拙らうより形成を引出しえてさゝげ　ヤアコリヤユレ軍肉めいろさゝんで居る　監「ドく
ト涙より袖よおゝけに涙でうつやくさんて居る　市「ハテ扨行き左右に原が軍
肉が出来てたすみそのうコリヤ軍肉　トいひく泣より袖にこうやくさんつ
て持る市イ　監夫「何の事じや　ト市にしかとうんて見すれさるに左右と見
左はんぶんで左を放れらハド眉間とあめくしへ鉄炮疵とおへる　夫「すをかてされ
の手練中くよみはそのさのまさざてるかうやん　夫「是是にさうる所積が竭
の名人駒木根八郎頼せんらうより向と立出よりでを何に所頼とひ
ためして眉間とめうけかくの仕合とうん人を　ト市の尖に是り律にて　市「いりう急
駒木根という鉄炮の上手であり　ト市が名誉ひそ組子大せんうまに出るく其まく　玄就ま切めとゞけ
「その昔そうらや　軍玄「うさく　ト夫せも一所に成てさるくとう手く　玄「軍師鎗の塚の孫斗
身をも尼子の一族名誉玄龍という者　夫「此陣中へ入込しへ某も尼子
の伏臣鹿子木左京という者　夫玄「のがれぬ所に覚悟せん　監夫どもに「掴ころす一筋
せいろうをきつくじつて眼いせらぬようあつても當社の境うせ観念むろげ
ト入れの立かゝりまくる立まわり　チヨンくまて道具を留る
まてどりにとうへよくと留る
造り物一面よくんとある宮の景色吉中にこうら吹のされれのある
一ツ家上の方にうん車丈ある棕の立木　椿がうての方に宮の流まで

ひろち
中村
三九

甲越し助
中村玉の丞
山花ゑめ
嵐小六

小栗塩のえぼし山吹の盛り毛利、岩藤、綾の女房姿にて上の方なる桜
の枝に折紙をぶら下げ結び付てあるえんけいせんにむかひ同じく綾の女の
姿にて下の方にて折紙をうけて居る人へ甲斐し助綾の男にて
右家作の傷にて火ぜつにして煙草のくゆる各右の人へ
道ゆく人に聞くと一時ほど上の方へ出ずるりをもて生とつれ出とゆき
うたの三味線にて一時ほど道を聞ふ

一るもあくるも変へめさもげふ二人めるの夜のあうたと景家の御孫
今ようほ面めくたの若うげやあ垂と折紙のうり住居いりと垂とう宝め
あたる　そうげらふのうたくあくるの泡うや栗時の甲斐も若草の家
のてう廻とうをいもとせのうちあたるふ中くふかるると揚の一枝も夜
さむとたのぐちの面湯てや鹿のようとふく昼るるうぬ家の雪せめ

てて君のうほぐふもてやちぬ勇の夢と関とつ間つ女まのちぐのあう
ふうういちよげて社や役のひふぐき若の深雪のうけーあく將ーつうれや
るぐーき　ト右文るのうち岩藤さくふ結冊つけうのの枝と折甲斐し弁のたぐ
のりてあてううようべたぐことをとん牧甲斐し分うあう甲斐し分うえ
て参りとうひふ家をたくもあがうと周とゆう甲斐し弁ちりとさせるとトコ出た
ちれうう三人めいーよ家とうて牧うるのようあうるうひりゆうくあうべし

一かーくちりと徐ようふ二人あがーう徐うや　ーアイくむちぐ名もうと
ゆとんぐぶようのういあや　一アイくー徐も大うたぐ強て吉牛ゆうういちるる
う地ゆへち強ゆうふ言号れ岩藤名住付もあうれぬ更とおるがいるひぐ
ゆうふ市　一何のりふア綾山ぐりのるうぐでる殿御と一面ふううにぐ家ーこ
ゆ殿名でちふいとちの人の垂俗ぐの今加ゆるる結冊ーあれうり枝よ
つけうがあれでよりうへ一よりくくうくうう枝ぐうーどゆ時ふ二人ふぐううへ
来るーふく仕ゆ何と世間の若とうあれて人をゆうう鹿猿もうううぬ

ふのふ山の若狭より三人一所よりとして所ごとにもうもうへんでさふいう「ほんふ」
うんとまるがア寅をもんとうふ所でうんとへ「ほんふ」ふうとしてい若るもの
甲 ハテ〳〵ハテ〳〵ハ今来る山の若狭世界でうを
名草の塚とうふて今軍の家中所で其軍場とうを〳〵とめけて二人と
連立世若狭のさう世帯結めて紙のをだうふうを所が結見塚の
乙 ふ〳〵うん時〳〵みうを山のう〳〵きを文をまがからけてようを〳〵「ほんふ」
甲 うを山路の風景一世紀の国付名所〳〵も多き角ケレ ト おびざ〳〵る
文るまうう
甲 あれ〳〵あとをうんやアう若年のひとをび松原ふのうをもふうをう和
哥の浦えの夕ぐををひれいて拝ぶねるの関をう人間の中垣や雪井をる
うふおうひればうをゆ〳〵後まの結乳山ほんふ井中の清水さうひををぬ
縁のむをばれ流れおをうひ川井のせう〳〵ふをれの乳と肌あのをう
をう見ひう縁をそられぬうさほうさ是をを思へうさ思ひのつういせ
ぐ〳〵みうくうけもう〳〵や芦垣〳〵て深名をも又為ふもう人命をうさ
うをうひうをのぐふをう寿拍くゆ〳〵ぐうををおうをのういふア ちぐ むを付て
いう〳〵さがをうを結の落穂をいづうふくさ結びをめ〳〵の名と出てあふ
う緑宝めくをれををもどの枕きふ為理のおうものう今更
いうを弧〳〵ふぐう文婦の髪うをを糸のようをふをぬ下細をうを
をめてう今迄ふ外の殿御の肌をうをを初めて登る恋の山情ふうを
学るの神音の床もいつ〳〵うふ寝乳を袋のをう〳〵とみをふ寝の玉
うーげぐんの神をれと接付て笑顔をうをうふ姿をを不倫をさたが民
士方ふをれをうとあふ御家をでうをんぐでうをんとをうをとをを抱えぐ
のあぐむもを理ードもふあをうう者と殺をあふ嬉〳〵ふ別をの

つらされ待宵を筆のさやなみてめぐる夜の数せり出よひの寝やの
さゝめごと濡て中鹿の乱かくなくふたりかなくし一ツ母結び乱ぞりく
つ根をひ縁そのつのもいつしかに折りし朱の一すげ鼓も紐もみぢも
寝る気ふもよふそふつんてよりなお都中の妻がせだ 甲「なく／＼ふたりなから行
も其方ふせる合爰をおもひさぐ逢とせり合さぬ母らふいつの夜さ
ト申といふてまんざらでもなかつたかこれ気づかひしやんな地黄や
玉子のせんでとで我身をちふ五月雲なめぬさゝぬ遠いぬ纏綴へこれ
今あんドさ此哥あれがむそこれは無ふしじや是とよんでこゝや トよむ
哥の出さをこんせふあん主よりんて 岩「一杯さらり志めてかゝし紫の庵 岩「とめぶ部の
出へやすほらん 甲「なんとどうらと、ふゝもすゞり投しらぬ梅と
ほらららの唐犬の桃薗に義を結び是を谷間のさくらが引て縁を

結ぶ右と左りの月よりも 岩「それでかんとひふぢら 一岩姫 岩「此上
ともに二人して 両人「いとしぼからふたりじやア 甲「なく／＼いゝもの無りよ
ふたりとも合点か 両人「合点じややらいナア ト大小入の文中より出し是より あかげさんであるど出して
のらりしいあつてよろしく留る時 あつかつて寿門りあつをさせる不義二人を討しあて 甲「アゝ遠ぜめへ 岩「せまく山の
上で軍と申すが親つさのたいナア 岩「コリヤ岩 どふまでもよふらふ乎ぞつとかア
トまん中ふ甲斐 [illegible] 甲「ハテこちは夫も何にもあれ軍場といふから戦て
ある岩屋の一家親も味方も家へ来て寝つかひをかいに落付ていやく
両人「それもそふかいなア 甲「ナアそこで一ツ弄やりなく ト是より中場を
うけて売ぜめうをとめて引ていやトおとなる 守「おんらが住居なる岩屋のぞんぶりく 岩屋の
岩を枕にふれてあひ寝くらむや清水とえらんで打やせく おんらが
住居なる奥山に咲さかく桜木の花が根を枕にふれてころび寝

の影とんでゝ〳〵ゆかせ〳〵 甲 風うあらぬうるうの蜜よう武
者一騎ころ〳〵ころんで落ろう若間ト丈だふ〳〵うて丈丈ようう清村朝
のらら〳〵まうけうて三人の 甲 アコリヤ何じやト朝ちるこうかさとう〳〵
ゝゝトのうものこと体 せんとうりこと 遠うらん者を音ゆもゆをくいよりて見ゆもさよ
世文名茅の原を計間一騎出子宮祥といつれる宮津村朝ちうゝゝ
秋度ありをいよれ歌とろうもう紀伏んと思ひおゝつてわられて
ぜんてうう落し所〇 甲 アこうや対を小句かさ甲蜜さ助じやあり
うゝぬと ト 甲 蜜さ分ようるとドロ 引ゆ てふうとうふ朝ちるのをゝめて
きりうるとドロ 朝を振つウトせりしちる
三人 これを ト 丈ふ〳〵〳〵て服れのおとゝ〳〵の丈丈の丈丈
三人とうぶい 甲 るうゝうんて 甲 アそう方を乳母の小夜路 紀の路ある名茅の景の掘
花ちうて若間の雪とろうん 甲 アア甚哥とうゝせんゝめ世山源の

若合ふろゝ迫ちゝうせ〳〵が今よおて 甲 アア甚定と勇ぶ出 蜜ひ
思と世ふ三んと思ふ仏の一てじふ小深ゝもゆゝぬ縄縄の一念亟せ〳〵
葉遍うてユレ和子天の羽衣ちを小入ゝ〳〵ト宮の袖を 甲 スゆゆう
景いの葉亟うてトいひ〳〵第とこつゝやゝぎれあ紀天の羽衣亮とうゝて
ちうゝる毛利の家園これといゆもうだ情 ちうゝが為小祥仏甚
殿拵の守り神ゝも 甲 たゝへゝ〳〵ゝ丈ん情の程子〳〵乗ん 蛙 や今こ
を成佛ちゝぐ〳〵乗ゝ了弥陀佛 甲 南無阿弥陀佛ト どろ〳〵うてさゝぐ
甲 ひよちゝ急ん出陣ふうう若地じゆト朝人をつれゆうゆ
浮ちり コリやさせぬてと飛うる 甲 ひゆあ〳〵ちふ甲蜜さ助ふうの女ゝ渚ちうよ
ひのきゆやてう〳〵とうてびゝひけどうつゝや一回倒あとゝ二
ゝ三うゝとちうゝと車投又紀上門て祈うゝと隠る神垣ゝ〳〵

栗島甲斐之助
中村雷蔵
立花右近
坂東重太郎
東條左衛門
二代目
嵐橘三郎

ひらめく稲妻電光石火室の戸を蹴てひ出るぞ ト左平は甲斐

此之介二人をとつて鯛右衛門を蹴けるゆうつして鯛右衛門 チョンと返し

たれとうろく立かゝり跡へ引て四人をまねく

見附の役役採の枝々も小暗く でてある一面よろうで外廓のてん

右の役採ぶらんへつく間なぐるりと返る ト又東へあるつゞし山は

あるとドンチャン甲めると西の方より田畑左京名草玄龍ほか

東条左衛門鹿子木左京四人切むすび出る

左衛〽鹿子の一族名草玄龍 左京〽鹿子木左京 左衛〽うごむろげ 左京玄〽ちよふ紀

物ぐるひじや ト西方よりて立かゝりて下い進でむと

監物鯛右衛門をうつむを引き飛び出る

紀あぶれじや 監〽よい聟監物が首をとつてくれふ 鯛〽ちよつと見る ト立廻

鯛〽宇津邑鯛右衛門が

あがいてたちがゝる進退とむかふより甲斐之助よろぱふるようにて切むすびとさげ

出るを左右にかゝり出る甲斐之助を左右よりとりまきて不意をとめる

甲斐〽甲斐之助合 甲〽勝利の達人め林鹿ね弘めて弱木根八郎と一騎打の

勝負をとげ首取てかくの通り ト切首を差出す 左衛〽此上は右大将義久 〽軍

師鶴塚一番乗の手がら此勝利早々つけ 義久〽ハツト甲斐之助むかうてたし

がつてへうけて左へ入右を右手前へ入 返し

右の外廓鉄音聞えて左右に引分る向ふに陣家の体義久

鶴塚太郎いまて甲斐之助市ノ正四人立廻りの足へ監物右

近左衛門付添居る皆々しく向ふに出る

皆〽反逆人うちとつたり ト皆々寄て皆々喜びて物語りの日甲斐

此之介二人して鶴ふつつよしえの

〽目出度打出し 幕

平

繪本傾城飛馬始七之巻大尾

浪華曉鐘成魁

文政七甲申年春三月發行

心斎橋通唐物町

大阪書店　河内屋太助梓

八文舎自笑編　諸方好人衆細評

三都役者大評判記

出情新　全三冊

顔見世藝品定位付一年中狂言並尾張伊勢堺其外諸所寄舞妓狂言の名曳さゞ細評仕毎年五月二日新版發兒ゝ御求御覧あ分下ゝ

口上

此所小形ゝ表題ゝ寄舞妓狂言の大秘書ゝ都ゝ江戸でゝ大悦せ申ゝ浪華ゝ乃若子ゝ御承知ゝ根本繪入の見録書御ゝぐさゝ御勝手次第ゝ板元ゝ利欲のゝ免度ゝ拔露申上ゝ不殘ゝ求御覧ゝ分下ゝ

宿亜愛七義　多湯

繪本戯場栞

松好齋画　全部三冊

平野撞八

戯場言葉草

右同画　全部五冊

五大力

繪本壁生草

上同画　全部四冊

法界坊

春景淺茅原

苦國画　全部五冊

繪本菊の戯　嵐雷子景事　全部二冊

忠臣連理鉢植　松好齋画　全部二冊

役者濱真砂　右同画　全部六冊

川寄音頭　右同画　全部五冊

畫本棧道物語　右同画　全部六冊

文月恨切子　春好齋画　全部四冊

猿曳門出諷　右同画　全部三冊

三勝樹茜根色指　右同画　前後八冊

戯場妹背通轉　芦國画　全部四冊

伊呂波國字忠臣藏　右同画　全部四冊

定結納凡櫛　芦國画　前後七冊

拳褌廓大通　右同画　前後七冊

敵討嚴流嶋　右同画　前後十二冊

傾城倭荘子　右同画　全部六冊

名作切籠暦　右同画　近刻　全部三冊

姉妹達大礎　上同画　全部七冊

傾城黄金鯖　全部六冊　近刻

桒名屋徳藏入船噺　鍾成画　全部七冊

霧太郎天狗酒宴　右同画　全部七冊

繡像飛馬始　右同画　全部七冊

旭文庫

新編投素梯　鐘成画　全部六冊　近刻

大和國井手下級　右同画　全部五冊　近刻

雪國嫁成谷　右同画　全部六冊　近刻

繪本百の紅葉　右同画　全二冊

近日売出し　金時金太郎

天滿宮案獅御供　鐘成画　全部五冊　近刻

三千世界商往来　右同画　全部五冊　近刻

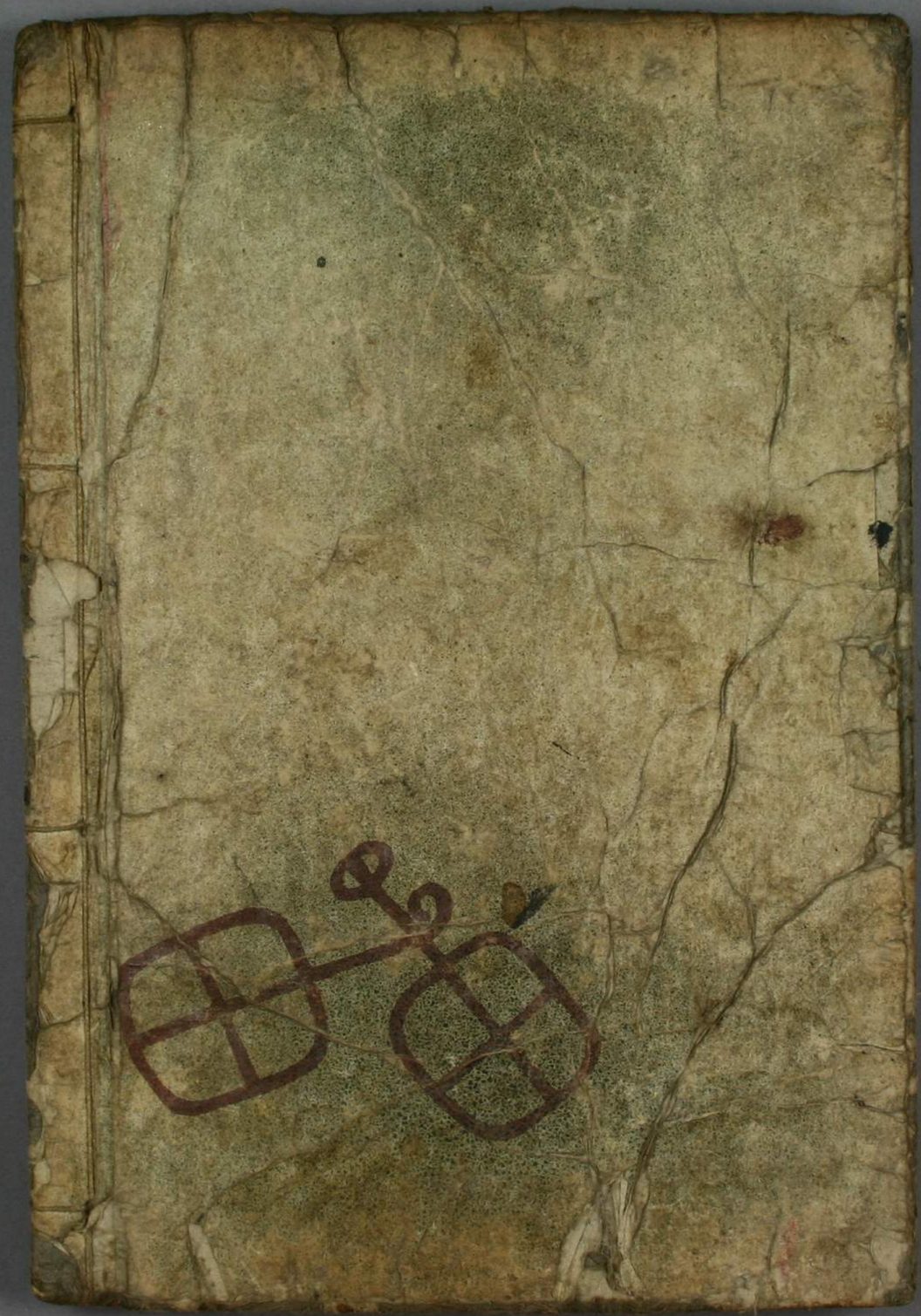
書房

名古屋本町十丁目　松屋善兵衛

京都寺町通御池上ル　鉛屋安兵衛

大阪心齋橋通傳馬町　塩屋長兵衛

同心齋橋通唐物町　河内屋太助

俳優似顔生寫錦繪

類色三有